

これからのことを…(4)の2

●方丈記が(つ)り(ま)る(こ)と(館)だ(よ)り



鴨長明

方丈記冒頭

方丈記で書かれた災害等

1177 安元の大火	長明 23 歳
1180 治承の辻風	長明 26 歳
福原遷都 6 月	
京に還都 11 月	
1181 養和の飢饉	長明 27 歳
1182 養和(寿永)の飢饉	長明 28 歳
疫病	
1185 元暦の大地震	長明 31 歳

3.11 でよく読まれた方丈記、今も

長い間書けなくてやっと。方丈記をにわかに読んでも中々理解できるものではありません。

何度も読んでいたうちに、当時、源氏と平氏の争乱が常時ある中、大火、竜巻、遷都、飢饉、疫病、地震に見舞われた市井の人たちはその中をどう生きていたのか。力を持たない、財を持たない人たちはどうしていたのかと言う所に関心が向くようになりました。

今のコロナ禍(長期化に更に苦しい方々が)に加え、水害、猛暑が立て続けに襲ってくる今の状況。方丈記が詠まれる所以とは、その叡智とは。(次からが前回 128 号の続きです)

養和の飢饉に疫病が…

飢饉の後、あくる年は立ち直るかと思っていたが、前年の状態の上に疫病が勃わってとんで

もないことに。相当な身形の人さえも物乞いをして歩き回っている。朝廷は「養和」から「寿永」との改元に運をかけるが(長明が生きた 61 年間で改元は 21 回も)、功を奏せず、多くの人がその場に倒れ、道の端で飢え死にする。賀茂川の河原などの死体の捨て場では、馬や車の行きかう道さえないほどに。死



今の賀茂川

八幡まるごと館だより

2020 年 8 月 17 日/129 号

<発行> 八幡まるごと館/八幡市男山松里 12-20 (TEL&FAX) 075-983-3664 (9時~17時)

(E-MAIL) yawata@marugotokan.net

ホームページは <http://marugotokan.net/>

又は、八幡まるごと館で検索して下さい



八幡まるごと館は街行く人のだれもが自由に立ち寄れる“地域サロン”です。休館日は毎週火曜日全日と土・日午後です。

骸を取り片づけることもできないので、臭いにおいはこの世の全てに満ち満ちていた。山人も倒れ、薪まで不足して、中には家を壊して市に出て売りその日の命をつなぐ人もいた。長明は薪

の中、赤い塗料や箔などがついたものを見つけ、調べると古寺で盗んだ仏像を割り砕いたものだった。

『濁悪世にしも生まれあひて、かかる心憂きわざをなん見侍りし』(訳・まさに私は濁悪の世に生まれ合わせてしまい、こんな情けないしわざまでみてしまったわけです)。末世そのものだった。

鴨長明は方丈記冒頭のゆく河の流れで無常を表現、世の中にある人も栖(すみか)もそれと同じだと著している。しかし、その中であって災害に翻弄される人々に対しては前回の『憂い悲しむ声、耳に満てり』のように、民の声なき声をこころでしっかりと聴き、次のような場面も眼にしている。

『いとあはれなることも侍りき』

さがりたき妻(め)、夫(をとこ)持ちたるものは、その思ひまさりて、必ず先だちて死ぬ。その故は、我が身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、まれまれ得たる食ひ物をも、かおひに譲るによりてなり』(訳・大変いたわしいこともありました。離れがたい、いとしい妻、夫を持っている者は、その愛する気持ちがまさって、深い者が、必ず先立って死んでゆく。そのわけは、我が身を次にして、相手をかまいそうと思うゆえに、ごくごくまれに得た植物をも、その人に譲ってしまうからである。)

無常と言われる世であって、こういう関係こそが立ち消えないもの、力を与えるものではないかと感じられる。悲しいけれど、壮絶な人々の生き死にの中で、誤解を恐れずに言えば、この場面で明かりが見えてくるように。人と人の気持ちがつながって、そのことが何よりも力強い。

この飢饉で当時の平安京の人口が 10 万人前後、そのうちの 42300 人余りの人が亡くなったという。

方丈記で唯一名前が登場する仁和寺の隆曉法印。死者が成仏できるようにと死者の額

に阿の字を書いた。長明は 2 ヶ月かかって、その人数を数えた。

今度は地震が襲う

1185 年 7 月 9 日正午頃マグニチュード 7、4 京都盆地北東部を震源とする。山は崩れ、河を埋め、海は傾いて、陸地を水浸しにし、…地が揺れ、家の壊れていく音は雷の音と変わらない。余震が 3 ヶ月くらい続く。

『月日重なり、年経にし後は、言葉にかけて言ひづる人だになし』

後は皆忘れて口に出して言う人さえいない。800 年余り前も今も変わらない。

色々思ったこと

ゆっくり落ち着いて考えることもできなかったけれど、何か用事をしている最中に方丈記が何度も浮かんできました。宿題の様に。長明の若い頃 8 年間には多くの災害がどっと押し寄せて来て、その様子をつぶさに、特にその時の人々の様子を見て著しています。平安末期から鎌倉時代には貴族と武士が大手をふるい、その他の多くの人々ははどうしていたんだろうか。その身分を当たり前前に受け取っていたのかもしれないけれど、災害が一番襲うのは今も変わらず、弱い人の所。特に飢えて食べ物がなく一家全員が餓死という状態が見られたと言います。これは今でも世界に。

そして、鴨長明は源氏と平氏の争乱をみてきたはずですが、一切書かずに災害の中で苦しむ人々の姿に目を向けている。何故なのか、「貴族の世から武家の世へと時代が大きく転回していく中、その世の有様を冷酷なまなざしで観照し、一管の筆にそれを託した時、政治的関心の強い鴨長明はなぜ政権の交替、戦乱の帰趨など、天下国家のことに触れず、災害に目をむけたのか……、こうした国々の民の生き死にこそ、歴史というものをつき動かしていく根源であることを長明は冷たい目で見すえ、そして声をひそめて語ろうとしたので

裏面右下へ続きます

折り紙教室

<7月にこんなことをしました>



さんはアジサイの花も持って来て下さっています、工夫次第で何にでも写真たて等の飾りにもバッチリ。お店の飾りでも同様な物があるそう、そういう所が目がいきそうです。

3日 2月14日にバラの花を作ってその後葉っぱを作る予定がこの日にやっと。緑色のテープで葉っぱを作りました。ただ巻いていただけでしたが、色んなことに応用が出来て、出口宏子



オカリナひまわり



20日(写真の日) 少し余裕をもって座りました。何事もなかったように全員が揃うにはまだまだですが、毎週練習することが色んな意味で

力に。何もかも忘れて心を開け放すことも可能です。まるごと館でのコンサート予定がたちませんが、今はレパトリーを広げて蓄える時と考えて練習に邁進です。

絵手紙講習会



8日 何人が帰られた後写真を撮るのを忘れていたのに気が付きました。6月より参加者が少し増えましたが、安心して来られるにはまだ時間が必要なようです。夏野菜の全面登場で、まるごと館の壁

面にはそれらの絵手紙がいっぱいです。いつも講師の森本玲子さんには気苦労をおかけしています。教室は他にもされていて、この時期実施できないこともあって、お気持ちは大変だったと思うのですが、この日皆でワイワイまでは行きませんが、いつもの方々が揃うと楽しい、嬉しいです。この数ヶ月の経験から。

理科の実験



17日 この日は低気圧と高気圧の学習でした。これから天気図を見る時の助けになるような内容でした。木下章司さんは天気図等のプリントを用意して下さい、よくわかりました。でもテストされたらどうか？簡単でしたが

作業もあり、合間に宮地さんからの適度なコメントも参考になりました。この下図の意味が今までよく知りませんでした。

八幡の歴史

23日

前回の続きです。源氏に続き足利家の石清水参詣。八幡信仰に力入っている。特に義満の母良子は石清水検校の善法



寺通清の娘で石清水もだけれどそれ以上に善法寺家を重んじたと言われる。この代々の將軍が何度も石清水八幡宮に参詣したと出口修さんは話して下さい、8代將軍の義政(銀閣寺建立)が参詣した時の進物は沙金2袋20

両、白太刀5振、神馬3頭他多数。当時の八幡は経済的先進



地、河川や京街道、奈良街道など水陸の交通の要衝で商人職人、農民もたくさんいた。貨幣経済が成り立っていて階層が存在していたようだ。橋本や淀川廻りだったと。次は安居神事のお話

八幡まるごと館 8月・9月の予定 休館 8月11日(火)~8月18日(火)
<パソコン教室> 毎週月曜日 10時~12時です
 8月3日(月)10時~12時 参加費 300円(コーヒーつき)
 8月24日、31日パソコンを持って来て下さい。

<オカリナクラブ ひまわり> 楽しめる時こ
 8月3日(月)13時~ 参加費 100円 残り8月は24日、31日のみです。

<歴史を学ぶ 新八幡の歴史 NOZZ>
 8月20日(木)13時30分~ 講師 出口修さん 参加費 100円 月1回です

<折り紙教室 第11回> どうぞお楽しみに。
 8月27日(木)13時30分~(初めの日程と1日変わりました) 講師 出口宏子さん
 参加費材料代は100円 持ち物 カッターをお忘れなく

<楽しい理科の実験 NO34> アイスクリームを作ります
 8月28日(金)13時30分~講師 木下章司さん 参加費 300円(コーヒーつき)

<絵手紙講習会> 8月は例年お休みしています
 9月9日(水)13時30分~ 講師 森本玲子さん参加費 400円(コーヒーつき)
 次回は10月14日(水)です



七夕飾りしました
 例年とは違う日々を送っています。竹をお願いして0歳から80歳代まで参加していただきました。11年もやっていて何故か初めての表ページからの続きですある』(「病いと人間の文化史」立川昭二)という文章を見つけました。日本だけでなく世界での疫病のことが歴史にどう関与しているか。また、「方丈記」解説者浅見和彦さんは「大火に逃げ惑う人々、竜巻に被災した人々...餓死していく家族の話は長明の目線がある種のまなざし(弱者への目線)を向けていたことを認めていいように、と。その目線の究極に映ったのが、死んだ母親の乳房に吸いついている嬰兒の姿であろうか。そして説教師という芸能(室町末頃から江戸時代)で語る初代若松太夫という人のことを紹介されている。夫婦などの哀しい別れ等を物語る。若松太夫の言葉は「苦しみを人びとと共有することができた人のみが初めて出せる声である」として、方丈記の1文とそのまま直線で結び、つまり長明と響き合う。彼(鎌倉後醍醐天皇)で死亡。「このもの食べる分がなくなるので、私は食べません」と引用ばかりになりましたが、100年余り前にかかれた方丈記が今も、というのがわかるように思えます。次回もお付き合い下さい。(うえたに じゅんこ)